

千葉県南房総地域における盆花利用の変容

川村清志¹⁾・柴崎茂光²⁾・島立理子^{*3)}・田中理恵子⁴⁾・真柄 侑¹⁾

¹⁾国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町 117

²⁾東京大学大学院農学生命科学研究科

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

³⁾千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

⁴⁾千葉県千葉市

*E-mail: shimadate@chiba-muse.or.jp

(2024 年 12 月 1 日投稿)

要 旨 千葉県を中心とした植物の方言名と盆の墓参りに利用する盆花に関する過去の調査報告をもとに、盆花利用の追跡調査を行った。まず、半世紀前に編纂された千葉県の植物方言とその利用方法についての事例を網羅した『千葉の植物方言 第3報』から、南房総地域での盆花の調査事例を参照し、その特徴を把握する。次に同じ地域で2024年に行った盆花についての調査データを報告する。これら二つの事例を比較、整理することで、盆花の利用がどのように変化してきたのかを考察した。その結果、半世紀前と現在では、利用される植物種に大きなずれがあり、とりわけ1970年の時点で利用頻度の高かったアセビやヒノキの利用がほとんどみられないことが判明した。それに対して現代では、アスナロの利用が地域を横断して広がっていることと、周辺の量販店などで、アスナロが販売されていることを確認した。さらにこれらの地域で特定の宗教的な信念に基づき、花のない盆花を供えることが聞き取りから確認された。伝統的にみえる植物利用についても、商品化による流通や個別の信念の変容に影響を受けていることがわかる。

キーワード: 植物方言 千葉県 南房総 盆花 シキミ アスナロ アセビ

言語学者の金田一春彦は、日本は、「世界で一番植物の名が多い国」、と記している(金田一 2016)。それが主観的な感想の域を出ないとしても、日本語の辞書や事典、民俗誌資料に多くの植物の名前が記されていることは、紛れもない事実である。このことは国内の植物相が豊かで、名前の付与された植物が多い、というだけではない。一つの植物が、地域ごとに様々な方言名で呼ばれたことも、日本の植物の名前にバラエティを与えてきた。もっとも、これらの多様な方言名が、研究分野で注目されることは少なかった。植物についての自然科学的な視点においては、多様な名称は混乱をきたすものである。特定の種類を同定し、一つの名前に収斂させる必要があった。生き物の名前には、ラテン語の二名法による世界標準の学名が付与され、日本では標準和名が用いられた。標準和名の選択に際しては、比較的流通した方言の1つが採用されることもあり、多様な地域の多様な名称は、抹消されてしまう。もちろん、研究を進めるうえで、

体系的な分類を行い、種ごとの名前を確定することは必要不可欠な作業である。

しかし、人文社会科学において方言は、地域の歴史や文化を解き明かす重要な文化資源である。植物に名があるということは、必ずその名を付与した人がおり、それらを伝えてきた共同体が存在したことになる。植物の名前とは、地域の人々と件の植物と何らかの関係性が切り結ばれていたことを端的に示すものである。各々の方言名には、植物の由来や利用方法を示すもの、あるいは人との関わりの起源を暗示するものなど、断片的であるが凝縮された情報が埋め込まれていることが多い。また、方言名を体系的に捉えなおすことで、地域の生業や年中行事、通過儀礼とのつながりを検証するだけでなく、地域間の交流や広域での文化的な展開を跡づけることも可能になるかもしれない。かつて民俗学者の柳田國男が「蝸牛考」(柳田 1990a)や「野草雑記」(柳田 1990b)で示した方言の歴史的変遷についての研究も、体系的な資料

の収集によって再評価できるかもしれない。

しかしながら、現在、方言名の調査研究は、非常に困難になりつつある。生活様式が近代化するにつれて人と植物との関係性は急速に変化してきた。近代以前から伝わってきた方言名も、人と自然との距離が広がるにつれて急速に失われつつある。そこで我々は植物の方言名を伝えてきた地域社会の歴史的背景や社会的な特質を明らかにするだけでなく、近代的な社会の均質化や合理化の中で、方言名がどのように変化しているかもみていく必要がある。それと同時にそれらの植物が、どのような社会的文脈の中で用いられてきたのか、その変遷の過程を明らかにしなければならない。

『千葉の植物方言 第3報』の概要

以上の問題意識から、ここではまず植物と人とのつながりについての具体的な事例を紹介することにしたい。参照するのは千葉県の『千葉の植物方言 第3報』である。この本は1971年に川名興がまとめた報告集である。川名は千葉県を中心として、植物の方言名とその由来や具体的な利用法などについて積極的に収集し、報告書を作成した(川名1971a, 1971b, 1971c)。

『千葉の植物方言』には、全部で727種類の植物及び菌類の方言が記載されている。その内訳としては被子植物が631種、裸子植物22種、シダ植物27種、コケ植物3種、藻類26種、菌類18種となっている。これらの植物の方言について話者の性別や年齢、居住地域が記され、方言名にどのような由来や意味が付与されているのか、どのような利用法があったのかがまとめられている。

報告書の様式として川名は、方言について「和名以外のものを全て方言とする」(川名1971a 3)と位置づけた上で、研究目的や調査方法が記される。質問紙法のハガキ例、調査対象、調査年月などの様式が示される。第2年次・第3年次については前年次と比較して追跡調査を加えたことや、調査方法を変更したことなども述べている。またこの第3報は、第1報、第2報の改訂版と位置づけられていることから、第1報をもって千葉県生物学会で発表した際の沼田真氏の批評を踏まえ、これに対する回答と今後の展開を最後に述べている。

また、報告書の巻末に標準和名の索引と方言名の索引が掲載されている。こちらを用いることで、和名と方言名の両方から検索することが可能となっている。

川名の報告書にはいくつかの特徴がある。すでに述べたように、ここには種子植物だけではなく、菌類や藻類も含まれていた。このようなカテゴリーの広がりや、分類学的な視点よりも、人と関係を有する多様な分類群を記録することが優先された結果だろう。次に紹介される植物には、自然界に自生する種類だけでなく、野菜類や鑑賞用の栽培植物、明治以降にもたらされた外来植物も

含まれる。このような事例は人と植物の関係性を検証するうえで貴重な事例である。その一方で、報告書としては課題となる点も多い。本書の調査範囲は千葉県と位置づけられているものの、方言名の採集地域としては川名自身が住んでいた南房総地域の事例が多く、相対的に県内の東北部の事例は少ない。地域的な特徴を考えるうえでは、やや蓋然性を欠く事例も散見される。また、700種を超えるとはいえ、千葉県内にははるかに多くの植物が自生しており、栽培種を考慮するとその数はさらに増加する。ここに記載されていない多様な植物が、人とのような繋がりがあったのか、報告書からは判断できない。県史や各自治体史における植物方言についての報告を重ね合わせることで検証する必要があるだろう¹。

しかしながら、1970年代初頭という、現在から半世紀以前の千葉県において、これほど多くの植物方言名が収集され、それらについての言説や多様な利用法が記録されていたことは、きわめて貴重であることは間違いのない。その報告書にまとめられた植物の方言名と活用法の総体については、今後、改めて検証を行うとして、まず本稿では、本報告書を現在の植物方言や利用法の研究に活用する試みを提示したい。そのケーススタディとして、報告書に示されているお盆の墓前に供える植物種の地域的な特徴を参照しつつ、現代においてその利用法がどのような変化を遂げているのかを検証する。以下では『千葉の植物方言』に記録された事例を紹介したうえで、50年後の同じ地域で我々が行った調査データを報告する。資料から読み取れる事例と現代での具体的な調査事例を重ね合わせて、その継起的な変化を捉える端緒としたい。

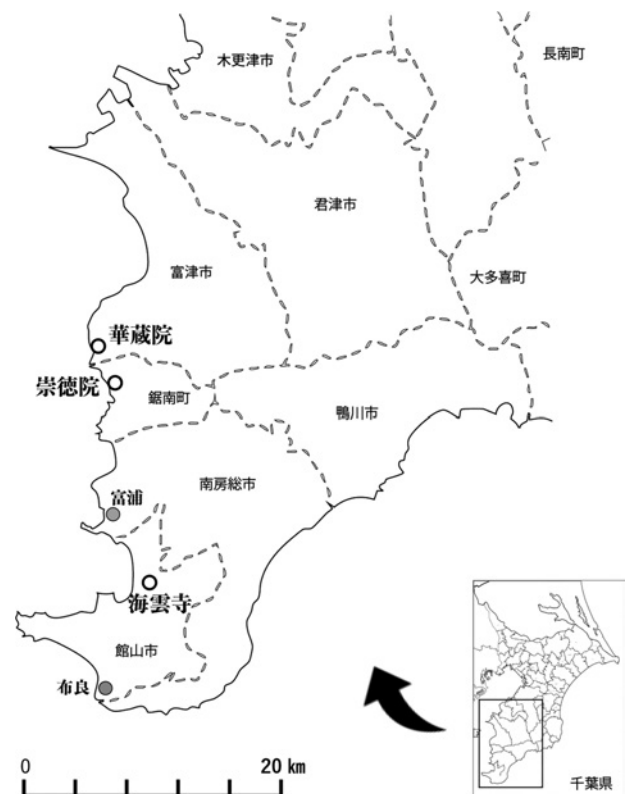


図1. 調査地位位置図

1 純粹に植物の方言名に限れば、『千葉県植物誌』の別巻「千葉県史料研究財団編 2003」に、その後の補足データが掲載されており、植物方言名はさらに増加する。今後はこれらの方言名についても参照したうえで、より包括的な検証を行う予定である。

川名興による盆花の調査

報告書によると川名は、1970（昭和45）年の8月上旬から9月上旬にかけて盆花の調査を行なっている。実施した調査地は鋸南町保田の崇徳院、富津市華蔵院、館山市北条の海雲寺の3ヶ寺である²（図1参照）。

海雲寺は、1676（延宝4）年の開祖と伝えられる浄土宗の寺院で、3ヶ寺の中では最も南に位置する（写真1）。館山市の市街地、国道127号線につながる街道沿いで、館山市役所からも近い。崇徳院は曹洞宗の寺院で、1661（寛文元）年の開創とされる（写真2）。海雲寺から20



写真1. 海雲寺



写真2. 崇徳院



写真3. 華蔵院

キロほど北にある、JR 保田駅のすぐそばに位置する。以下で述べるように川名は、崇徳院には2度調査に入っている。華蔵院は室町時代の1522（大永2）年の創建とされる真言宗智山派の寺院である（写真3）。崇徳院からは約3キロの距離で、現在では車で10分弱で移動が可能である。ただこの2ヶ寺の間には鋸山が位置しており、現在も鋸南町と富津市との境をなしている。実際、川名は、「鋸山を境として郡境に位置する崇徳院と華蔵院での植物利用の違いを観察しようとした」と記している。

それでは最初に、崇徳院からみていきたい。最初の調査は、1970年の8月9日と記されている。その際に崇徳院ではシキミが60%、アセビが20%で、マサキ5%、キク、その他となっていた。旧盆の8月16日に再び訪れるとシキミ60%、アセビ10%、ハゲイトウ5%、ハラン5%、サイプレス（イトスギ）5%、マテバシイ1%、トベラ1%、ソテツ1%、マサキ1%、その他菊の仲間がさしてあった。崇徳院の奥さんからの聞き取りでは、「青いものなら何でもいい、盆とか彼岸にはシキミとかイワシキビ（アセビ）を使う。イワシキビを使うわけは水もちが良い。イワシキビは滅多にない。これらの花は八百屋で買ってくる。盆とかお彼岸なら、何の花を使っても構わない」といった内容が語られている（川名1971a 184）。

次に華蔵院で1970年の8月26日に調査を行っている。こちらではシキミ45%、アセビ45%で、全体の9割を占めている。それ以外には、ヒノキ、サワラ、サイプレス、キンマサキ、アスナロ、ソテツ、キク類、ケイトウ類がみられた。川名はアスナロがあったことに驚き「アスナロは館山の布良と共通であり、ヒノキは富浦と共通である」（川名1971a 184）と記している。いずれも生き生きとした木であったという。アスナロを供えるという布良は、館山市でも最南端に近い場所に位置している。また、富浦は崇徳院のある保田からは15キロほど南に位置する。最後の海雲寺には、同じ年の9月12日に訪れている。この寺ではヒノキが80%を占め、その他にアスナロ、サイプレス、ハラン、イヌマキ、ハゲイトウ、キクなどがみられたという。

川名が調査した時期の最初の特徴として、南房総地域では、ヒノキやサワラ、アスナロといった針葉樹の葉を墓前に供える習慣がみられた。とりわけ海雲寺では、全体の8割の墓前にヒノキが供えられていた。

ただし川名自身が収集したヒノキやアスナロの方言は、あまりバラエティーがみられない。ヒノキについては、アツハダ（富津）、イシビ（香取、山武）、ロバ（柏）、ホンキ（鋸南、君津）といった方言が報告されるが、千葉の各地ではヒノキと言う標準和名かそれに準じた呼称が用いられていた。アスナロは、アスナリという和名に準じた呼称以外は、オーッパ（君津）とヒノキ（長生）の2例のみである。川名が参照する『樹木大図説』によ

2 ただし富津市の華蔵院について川名自身は「華倉院」と記している。しかし、JRの浜山谷駅付近と具体的な地名が記されているため、華蔵院であると判断して調査を行った。

3 全国調査を踏まえた浦山らの整理によると、盆花に利用される主な植物としてシキミ、ミソハギ、キキョウ、ハギ、オミナエシなどがみられ、また、複数の府県でススキ、キク、ユリ（類）、ケイトウなどが報告されている（浦山ほか2020）。

ると、ヒノキは関東ではあまりみられず、檜と書いてヒバ（アスナロの別名）と訓ませたという。ヒノキやサワラ、アスナロなど鱗片状の葉を持つ種類をひとまとめにアスナロと呼ぶ地域が、千葉以外にも関東の北部や東北地方にみられるとされる。

第二にこの地域では、シキミとアセビが複数の寺院で多くみられたという特徴がある。シキミについては、一般的に仏事で使われることが多く、他県においても多くの事例がみられる³。対してアセビは、この地域に特徴的な植物利用と考えられる。興味深いことにこれらの地域ではアセビのことを、シキビ、あるいはイワシキビと呼んでいる。植物学上は、シキミはマツブサ科のシキミ属 (*Illicium*)、対してアセビはツツジ科アセビ属 (*Pieris*) のため、全く異なる種である。しかし、両種の葉は互生で枝先に葉が集まり、葉身が長楕円形から倒披針形という形状のため、外見的にはよく似ているともいえる。

このシキミとアセビについて川名がまとめた方言の一覧が表1、2になる。アスナロやヒノキとは対照的に、

両者ともに多様な呼称がみられる。ここで注目されるのは、まず、両者がよく似た呼称ないしは、対応関係を有する方言名で呼ばれていることである。アセビの方言名として、市原では「シキビ」と呼ばれ、逆にシキミが県北東部の旭では「アシビ」と呼ばれている。また、富津ではアセビを「コバナ」、シキミを「オオバナ」と呼んでいる。前者を「イワシキビ」や「ヤマシキビ」に対して後者を「ホンシキビ」と呼ぶことにも対応関係がみられる。

第三にシキミとアセビの方言名に、いずれも墓前や仏前に飾ることをイメージする呼称がみられる点である。両者に共通する方言名として「タテバナ」があるが、これは花を供えた状態を指すのだろう。シキミについてのマッコーに類する方言名は「抹香」、コウハナに類する方言名は「香花」と考えられる。ハナやハナノキも盆花として供える「花」を指し示す呼称だろう。

川名はシキミとアセビについて、複数の地点で聞き取りを行っている。同じ地域であっても、両者を同じ呼称

表1. シキミの方言名（川名 1971b より）

	南 部	北西部	北東部
アシビ			旭市
オオバナ	富津市		
コウハナ	君津市		
コーツバ			香取市
コーノキ	君津市、大多喜町、木更津市		匝瑳市2
コーノハナ	君津2		
コツバ			山武市
コンハナ	君津市2		
シギビ		成田市、我孫子市	長南町、長生町、一宮町2、銚子市
シキブ	君津市2、鋸南町2、南房総市		
タテバナ	君津市、富津市2		
ハナ	君津市、富津市、鋸南町2、大多喜町		
ハナヌイ	君津市3、富津市1		
ハナヌキ	君津市		
ハナノイ	君津市2		
ハナノキ	鋸南町2、富津市3	市原市	
ホンシキビ	富津市		
マッコ	君津市3		
マッコー	君津市4、富津市2、鋸南町2、大多喜町、袖ヶ浦市	千葉市、市原市2	香取市、銚子市、旭市
マッコーバナ	富津市		

表2. アセビの方言名（川名 1971a より）

	南 部	北西部	北東部
アシビ	君津市、富津市2、鋸南町	松戸市、柏市、市原市	銚子市、長南町
アセボ		佐倉市、市原市、柏市	
イワシキビ	富津市、鋸南町		
オジー	富津市		
コハナ	君津市、富津市		
シキビ		市原市	
タテバナ	富津市		
ヤマシキビ	鋸南町		
ワセビ	富津市、大多喜町	市原市	

で呼ぶ話者と別種として扱う話者がいたようである。ただアセビがシキミよりも水もちがよいという話は、複数の場所で採取している。両者がよく似た別種と認識される場合もあった。例えば、富津ではシキミを「タテバナ、あるいはオオバナ」と呼び、アセビを「コバナ」と呼ぶ。タテバナ、すなわちシキミは、「さしておくとならば葉が落ちてしまうが、アセビはもちがいい」（川名 1971b 398）という。また、小糸町（現千葉県君津市）では、「20 年来シキミを売っているんです。人によってはアセビを好みます。長持ちするからシキミの代用です」（川名 1971b 398）という語りも聞き取っている。

以上、川名が調査を行った 3 ケ寺の盆花の比率の一覧が表 3 である。崇徳院と華蔵院では、共にシキミとアセビの利用が多数を占めている。つまり、鋸山という地理的障壁による文化的な差異はあまりなく、両者の盆花利用についての共通性は高かったといえる。またこの時点においては、シキミとアセビが互換的に用いられていた可能性が高い。さらに聞き取りからわかるように、すでにアセビを含めた盆花は、八百屋で購入して利用されていた。対して館山市の海雲寺ではアセビ、シキミともにほとんど見当たらず、ヒノキが全体の 80% を占めていたとある。ヒノキやサワラの利用は華蔵院でもみられたが、その利用頻度が館山では比べ物にならないほど高かったことになる。補足的に彼が示している富浦や布良を含めると房総の南に行くほど、針葉樹の利用頻度が高かった可能性がある。なお、この時点で川名がアスナロの存在に驚き、それが県の最南端部で利用されていたことを記していることにも注意しておきたい。こちらについては、現代の我々の調査報告と重ね合わせて改めて検討したい。

表 3. 川名興による 1970 年の盆花の調査結果

盆花	崇徳院		華蔵院	海雲寺
シキミ	60	60	45	0
アセビ	20	10	45	0
アスナロ	0	0	2	3
ヒノキ	0	0	2	82
葉物	5	18	5	12
サワラ	0	0	1	0
サイプレス	0	5	1	3
イヌマキ	0	0	0	3
ハラン	0	5	0	3
マサキ	5	1	1	0
マテバシイ	0	1	0	0
ソテツ	0	1	1	0
ハゲイトウ	0	5	1	3
キク、その他	15	12	1	3
造花	0	0	0	0

*単位は%。比率の表示がなかった植物については、便宜上、均等に割り振った。

現代の盆花の調査結果

この節では、今回の我々の調査の結果を報告する。調査は 2024(令和 6)年の 8 月 14 日に実施した。調査地は、川名と同じ上記の 3 ケ寺である。ただこれら 3 ケ寺の墓所は、川名が調査を行った 50 年前に比べて墓数にかなりの増減があるようだ。例えば、海雲寺は令和 6 年時点で墓所が大きく 2 つに分かれているが、そのうちの一つの区画は、ほとんどの墓が比較的新しく作られたものであった。ただその一方で聞き取りからは、近年、複数の墓仕舞いが行われていることも確認された。崇徳院でも区画単位で、新しく作られたところと放置されたと思しき複数の墓地がみられた。もっとも、川名は具体的な墓の母数を出してはいないので、この調査では、墓地数を比率に換算したうえで、検証を行うことにしたい。

さて、具体的な検証を行う前に、現地での事例を整理



写真 4. シキミと「生花」の組み合わせ



写真 5. アスナロのみが供えられている例



写真 6. サイプレスが供えられている例

表4 2024年の盆花の調査結果

盆花	崇徳院		華蔵院		海雲寺	
	実数	比率 (%)	実数	比率 (%)	実数	比率 (%)
生花	52	52	110	47	28	29
造花	36	36	50	21	39	40
アスナロ	1	1	24	10	7	7
アスナロ+生花	0	0	22	9	20	21
アスナロ+造花	0	0	2	1	3	3
シキミ	2	2	11	5	0	0
シキミ+生花	6	6	3	1	0	0
シキミ+葉物	0	0	1	0	0	0
シキミ+葉物+生花	3	0	2	1	0	0
サイプレス	0	0	2	1	0	0
サイプレス+生花	0	0	2	1	0	0
サイプレス+造花	0	0	2	1	0	0
その他の葉物	3	3	1	0	0	0
その他の葉物+生花	0	0	5	2	0	0
その他の葉物+造花	0	0	0	0	0	0
盆花なし	62		71		19	

*比率については、盆花の供えていない墓を省略した数を母数としている

する手順について説明しておく。まず、現場に行くと1つの墓地に複数の花立があるケースが目立った。本来、一つの墓に左右一対を基本とするが、1つの墓地に複数の墓石があり、各々に花を供えている墓地が数多くみられた（写真4～6参照）。これらについては、基本的に複数の墓石があっても、1つの墓地を1件として数えることにした。次に供えられた花の種類については、いくつかの種類に区分する必要があった。まず、シキミやアスナロ、サイプレスなどの葉物が単体で供えられているケースがみられた。そこでこれら葉物の分類として、アスナロ、サイプレス、シキミ、その他の葉物に区分することにした。複数の葉物が供えられている場合は、優占する種類+その他の葉物、とした（表4）。次にこれらの葉物と、キクやユリといった花が組み合わせて供えられることがある。このような複合的な盆花については、別カテゴリーとしてカウントすることにした。なお花は市販されているものが多く、草花だけのものを「生花」というカテゴリーに一括することにした。さらに川名の頃に既に普及していたかどうか定かではないが、造花を供える墓がかなりの数にのぼった。今回の調査では、「造花」カテゴリーとして全体の比率に加えている。今回の調査の、3ヶ寺の盆花の一覧をまとめたものが表4である。

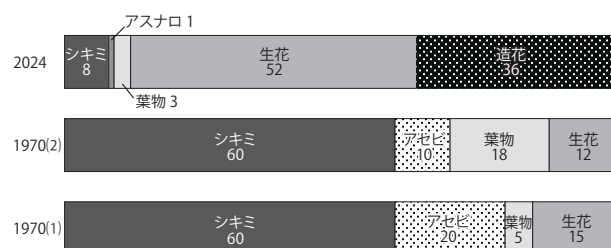


図2. 崇徳院の盆花

まず崇徳院では、確認できた162の墓地のうち、何らかの花が供えられていたものは、全部で100件であった（図2）。ここでは「生花」が最も多く52件（52%）を数えた。次に造花が36件（36%）で、この二つの範疇で全体の9割を占めている。残りのなかで特徴的な植物はシキミで、シキミのみの2件、シキミと「生花」の組み合わせが6件（計8%）みられた（写真4）。またアスナロが1件、供えられていた。このほかに3件の墓地で、ソテツの葉のみが供えられていた（3%）。「生花」の内訳は、キク、ユリ、カーネーション、トルコキキョウ、スターチス、キキョウ、センニチコウなどがみられた。ほとんどは市販のセットで販売されているものと考えられる。ただ明らかに野草ないしは庭に生えていたと考えられるタカサゴユリが、1件の墓地で供えられていた。現在、崇徳院の住職は不在らしく、住居と思われる本堂の隣家は雨戸も締まり空き家化している。かなりの期間、放置されている墓地も複数見受けられた。それでも、我々の調査の日には、駐車場に県外ナンバーの車が並んでおり、お参りを行いつつ花を供える人たちの姿がみられた。まだ花の供えられていない62件についても、盆の終わりに調査をすれば、もう少し多くの事例を確認できた可能性がある。

次に華蔵院は敷地内の墓地数がもっとも多く、確認できた墓地が308件、そのうち何らかの植物を供えてあった墓地は237件であった。最も多かったのはこちらも「生

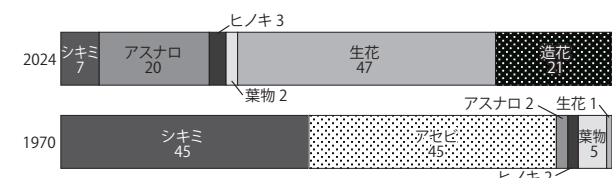


図3. 華蔵院の盆花

花」で、117件（49%）の墓地で供えられていた。「生花」の次に造花が50カ所（21%）でみられた。その次に多かったのはアスナロのみの24件で（写真5）、アスナロと「生花」の組み合わせが22件で続いた（「アスナロと造花」の2件を合わせて計20%）（図3）。華蔵院ではサイプレス供える墓地もみられた（写真6）。サイプレスのみが2件、サイプレスと「生花」、サイプレスと造花の組み合わせが、各々2件である（計3%）。アスナロとサイプレスは同じヒノキ科に含まれるが、属のレベルではアスナロ属（*Thujaopsis*）とホソイトスギ属（*Cupressus*）に分類される。遠目にみても葉の茂り方が、サイプレスのほうが繊細である。すでに川名の報告にもサイプレスは登場しており、当時から園芸品種として流通していたようである。最後にシキミについては、シキミのみの墓地が11件、シキミと「生花」の組み合わせが3件、アスナロとシキミ、さらにそこに「生花」の組み合わせが3件みられた（計7%）。その他の葉物は、単体で生けられていたのは、ヒサカキの1件のみだが、「生花」との組み合わせではソテツが2件、ハランが2件、シダ（レザーフアン）が1件みられた（計2%）。これらの葉物は、アスナロとサイプレスと同じように後方に生け、その前に「生花」を飾っていた。

また、「生花」の内実は、キク、ユリ、カーネーション、ヒマワリ、トルコキキョウ、スターチス、ケイトウ、センニチコウ、バーベナなどで、先の崇徳院とほぼ同じである。お寺の方の話によると「緑の葉はアスナロ、ヒノキ、カイヅカイブキ、ソテツ、ハランが多く、自宅近くに植えてあるものを皆さん持ってくるようだ」という。対して生花類のことをイロバナと呼ぶが、「（創価）学会の人はイロバナを嫌う」とも語られた。

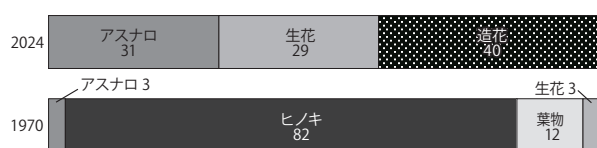


図4. 海雲寺の盆花

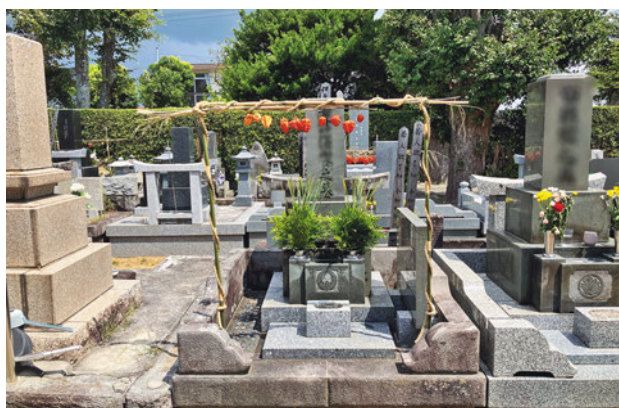


写真7. 「棚」と呼ばれる盆飾り
アスナロとススキの葉を供える

最後に海雲寺では、確認できた116の墓地のうち97件で何らかの花が供えてあった。もっとも多かったのは、造花のみの39件で全体の4割にのぼった。次に「生花」のみが28件（29%）、アスナロと生花の組み合わせ21件（21%）で、アスナロのみが7件（7%）であった。また、アスナロと造花の組み合わせも3件（3%）あった。アスナロとともに、ススキの葉を生けてある花立があったが、墓地の管理人によると、このような供え方は少し変わっているということである（写真7）。また、海雲寺では、「棚」と呼ばれる盆飾りを設置していた墓地が12件みられた。棚は墓の前に竹を門のように組み、そこにワラヒモを巻き、ホオズキをあしらったものである。盆飾りは初盆の家で行われるものとされる（写真7、8）⁴。

現在、海雲寺には、550基ほどの墓があるが、昨年だけで4件、墓仕舞いをした。「すでに子供の世代は、樹木葬や散骨をしたりして、墓の時代は終わった」と先の管理人が語っていた。造花の数が多いのも頷ける話である。寺の住職も跡継ぎがないまま亡くなり、同じ宗派の僧侶に仏事も頼むようになっている。

以上の調査の合間に、今回は、寺の近隣で盆花を販売している店を確認することにした。まず崇徳院に程近い国道沿いのスーパーマーケットでは、写真9のような盆花の販売コーナーがあった。菊を中心とした切花、ケイ



写真8. 「棚」と呼ばれる盆飾り



写真9. スーパーマーケットの盆花販売コーナー

4 こちらの棚についても写真9のように、ホオズキも造花を用いている墓地もみられた。



写真 10. 「道の駅 保田小学校」でのアスナロとシキミの販売

トウやカーネーション、トルコキキョウ、スターチス、バーベナなどをあしらった切花が販売されていた。また、これらの花の脇にはサカキやシキミの葉、さらにアスナロの葉が販売されていた。

次に海雲寺のそばの同じ系列のスーパーでも、アスナロが販売されていることを確認した。また、「道の駅 保田小学校」では、写真 10 のようにアスナロとシキミが大量に置かれており、それ以外にもシダ(レザーフアン)、ハラン、ソテツといった緑の葉が目立つ植物が販売されていた。これらの葉物の多くは、墓地に供えられていた種類と一致しており、このような店舗で購入された可能性が高い。

2つの調査事例の検証

2つの時代における盆花の調査概要をみてきた。これらの調査における植物利用の変化を寺院ごとにまとめたものが、図 2 から 4 である。図をなるべくみやすくするために、葉物と「生花」の組み合わせについては、葉物としてカウントすることにした。また、アスナロとシキミのように葉物が重なっているケースが数件あったが、シキミを可視化しやすくするためにシキミでカウントしている。その他の葉物については一括してカウントした。川名の記録した 1970 (昭和 45) 年と 2024 (令和 6) 年を比較すると、いくつかの点で興味深い変化を確認することができる。まず大きな点は、アスナロ利用の拡大である。アスナロは、1970 年の川名の調査では海雲寺と華蔵院で少数、確認されたのみだったが、今回の調査では 3 ケ寺すべてで確認された。とりわけ海雲寺の造花と「生花」以外では、アスナロが多数を占めている。逆にアスナロの利用増加に対して、ヒノキの利用はほぼ見当たらない。かつてはヒノキが 8 割を占めていた海雲寺だが、今回の調査で全く供えられていなかった。

アスナロの増加に関しては、何が考えられるだろうか。これは盆に参る者たちが盆花を購入する店舗の品揃えに依存している可能性がある。前節でみたように我々が訪れた近隣のスーパーマーケットや道の駅では、いずれの店舗でもアスナロが販売されていた。華蔵院では、「自

宅近くに植えてあるものを皆さん持ってくる」と語られているが、これは、現在も墓地の近隣に居住している家に限られるだろう。

この点から類推すると 50 年前にアスナロはそれほど流通しておらず、ヒノキが販売されていた可能性もある。今回、確認はできなかったが、華蔵院でサイプレスが一定数みられたということは、当該地域の周辺でサイプレスが販売されているのかもしれない。そもそも、針葉樹の高木が身近に生えている環境は、市街地ではそれほど一般的ではない。

同様に現代において減少した植物に、シキミとアセビがある。ただシキミについては、崇徳院や華蔵院で一定数の事例がみられたことから、時期によってはより多くのシキミが利用されている可能性がある。前述したアスナロと同様にシキミは、近隣の店舗で販売されていたからである。しかし、今回の調査ではアセビについて全く確認することができなかった。かつてイワシキビと呼称されたアセビ利用の消失は、現代における大きな変化である。ただしアセビの利用も、慣習的に行われていたかどうかは注意が必要である。50 年前の時点で、アセビも八百屋から購入していたと報告されており、当時から市販の盆花を購入する家も多かったのである。そのアセビが今回全く見当たらなかったということは、アセビを採取する家がなくなった、或いは販売する業者がいなくなった可能性がある。

また、アスナロやシキミといった青い葉のみを供える背景には、宗教的な信念も考慮すべきかもしれない。華蔵院での聞き取りで語られているように学会、すなわち創価学会員は、イロバナ (=「生花」) を供えることを嫌うという。後に君津市在住の方からも同じく創価学会では花を墓前に供えないという話を聞いた。宗教的な信念によって盆花が選択された結果、葉物のみを墓前に供えるケースもあると考えられる。

さらに、そもそも生きた植物を供えず、造花を供える墓地が、現代においては相当数にのぼっていることも確認できた。もっともこれは川名の時代になかったかどうかは不明である。当時既に一定数の造花はあったものの、それらを調査対象とみなしていなかった可能性も否定できない。しかし、海雲寺の墓地の管理人の方が語るように、今日、墓仕舞いが進行するなかで、定期的に墓参りをする者も減少しているというから、長期間褪せることのない造花を選択する家も多くなっているのだろう。少なくとも 3 ケ寺の全てで造花の率が 2~4 割を占める事実を鑑みるなら、造花の存在は、墓の役割や機能と合わせて検討すべき課題なのかもしれない。

おわりに

本稿では南房総地域の盆花に用いられる植物を紹介してきた。今回の調査においてはいくつかの課題が残されている。まず、現代の南房総における植物方言の具体的な事例を収集することができなかった。店舗での名称が一般にも流布している可能性は指摘できるが、実際に植

物を使用する人たちがどのように呼称するのか、調査する必要がある。

また、もう少し広範な地域での植物利用の実態についても調査が必要とされる。川名が言及だけに留めている布良や富浦の事例についても補足すべきだろう。現在、本当にアセビの利用がみられないのかどうかについても、確認しなければならない。さらに市販の業者を介する以前にこの地域の人々がどのような盆花を利用してきたのか、つまり 1970 年代以前の事例についても、今後、参照できる資料や聞き取り調査を継続していきたいと考えている。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP22K12582 の助成を受けたものである。

引用文献

- 浦山佳恵・須賀 丈・畑中健一郎・蓮 美綺 2020 「長野県における
盆花採りの衰退と野の花の生育地の消失」『長野県環境保全研
究所研究報告』16、p. 9-22
- 川名 興 1971a 『千葉県の植物方言 第3報 / 上』
- 川名 興 1971b 『千葉県の植物方言 第3報 / 中』
- 川名 興 1971c 『千葉県の植物方言 第3報 / 下』
- 金田一春彦 2016 『美しい日本語』角川文庫
- 千葉県史料研究財団編 2003 『千葉県植物誌 千葉県の自然誌別編
4』、千葉県
- 柳田國男 1990a 『蝸牛考』柳田國男全集 19、筑摩書房
- 柳田國男 1990b 『野草雜記』柳田國男全集 24、筑摩書房